<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Title</td>
<td>漢代における経學講論と國家儀禮 [釋奠禮の成立に向けて]</td>
</tr>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>保科 季子</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>東洋史研究 = THE TOYOSHI-KENKYU : The journal of Oriental Researches (2016), 74(4): 647-677</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>2016-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/240771">https://doi.org/10.14989/240771</a></td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Journal Article</td>
</tr>
<tr>
<td>Textversion</td>
<td>publisher</td>
</tr>
</tbody>
</table>
漢代における経學講論と國家儀禮

— 釋奠禮の成立に向けて —

保科 季子

— 1 —
はじめに

魏晛南北朝時代、皇帝・皇太子の元服には、自ら釋奠と講經を行う慣例があった。

礼、始めて学を立てるには、必ず先に先聖先師を釋奠し、事を行うに及んでは必ず幣を用う。漢世学を立つると雖、

漢代には釋奠儀礼は成立しておらず、魏・齊王芳の正始二年三月に释奠の図式となされた。年少の皇帝もしく

は皇帝を考へるべき能力の説明を行う儀礼性の高いものと述べ、その上で歴史期に講經を伴う释奠儀礼が確立された要因に

について、常時の不変である帝位継承が背景にあったと論じている。

皇帝たる資質を論ずる一覧の通過儀礼であったとするには、ひとまず異論はない。しかし、こ
そこで筆者が問題にしたいのは、釋典のような国家儀礼における講経という純然たる儒教の学術活動が包摂されていることである。

本來、儒教の学術的議論は、周公・孔子などの先聖先師の祭祀であり、當然ながら講経は附随していなかった。皇帝も先聖先師の祭祀と講経が結びついた最初の例としては、後漢明帝永平十五年（七三）、魯に巡行した際に出巡の儀礼で、

以后、毎年に行われた皇帝御前での講経、講論を国家儀礼に組み入れたものと考えられる。上記の言通しのもと、本稿では漢代に皇帝の御前で行われた経学の講論を検討し、その儀礼的性格を考察していくことにする。

皇帝臨席の上での最初の経学講論は、前漢宣帝甘露三年（前五二）三月に、宮中の石渠閣で掲げられた石渠閣講論である。この二つの宮中講論は、漢代経学史上の重要事件として何度も議論されてきた。特に白虎観講論は、いわゆる“儒教の国教化”問題の中で“国教化”的側面の一つであり、白虎観講論を以て“国教化”の成立とみなす研究者もいる。ただ、白虎観講論の先駆である石渠閣講論については、
太子太傅蕭望之，易...
博士施箴、黃門郎梁丘臨、尚書...
博士歐陽循、博士林尊、譯官令周堪、博士張山拊、謁者...

假倉／許／淮陽中尉韋玄成、博士張長安、博士韋廣德／許／詔...
太丞／博士張達、太子舍人遍漢／春秋公羊傳／博士嚴彭...

圭、侍郎申韋、伊推、宋顯、許廣／春秋穀梁傳／詔郎尹始武、...
太丞／博士達聖、太遜舍人滿漢／春秋公羊傳／博士嚴彭...

太子太傅蕭望之，易...
博士施箴、黃門郎梁丘臨、尚書...
博士歐陽循、博士林尊、譯官令周堪、博士張山拊、謁者...

假倉／許／淮陽中尉韋玄成、博士張長安、博士韋廣德／許／詔...
太丞／博士張達、太子舍人遍漢／春秋公羊傳／博士嚴彭...

圭、侍郎申韋、伊推、宋顯、許廣／春秋穀梁傳／詔郎尹始武、...
太丞／博士達聖、太遜舍人滿漢／春秋公羊傳／博士嚴彭...

太子太傅蕭望之，易...
博士施箴、黃門郎梁丘臨、尚書...
博士歐陽循、博士林尊、譯官令周堪、博士張山拊、謁者...

假倉／許／淮陽中尉韋玄成、博士張長安、博士韋廣德／許／詔...
太丞／博士張達、太子舍人遍漢／春秋公羊傳／博士嚴彭...

圭、侍郎申韋、伊推、宋顯、許廣／春秋穀梁傳／詔郎尹始武、...
太丞／博士達聖、太遜舍人滿漢／春秋公羊傳／博士嚴彭...
論語義疏
十八篇、
＜孝經＞
類に「五經雜義」
十八篇を著録する。
＜漢書＞儒林傳の「穀梁伝」の部分に、

乃ち五經の名儒太子太傅蕭望之等を召して殿中に大議し、公羊、穀梁の同異を平らげ、各人の経を以て是非を處せしむ。時に公羊博士劉咸議、侍郎申顏、伊推、宋顯、穀梁議郎尹更始、待詔劉向、周慶、丁姓亘びに論ず。公羊家多く従わず、願いて侍郎許廣を内るるを請ひ、使者もまた習ひに穀梁家の中郎王玄を内れ、各おの五人、議すること三餘事。望之等十一人各おの経説を以て専つて、多く穀梁に従う。是れ由り穀梁の学大いに盛なり。（＜漢書＞儒林傳）

文が、断片的に＜通典＞等に引用されて残るもののみである。このわずかに残る＜石渠禮論＞の佚文が、＜論語義疏＞が十八篇で合わせて三十六篇となり、「＜論語＞＜孝經＞ほかでやはり四十弱の議題が論議されたと推測される。これらの著録に見える＜石渠議義＞はすぐに散逸し、＜禮議義＞を基に後に戴聖が編纂したとされる＜石渠議義＞の佚文が、＜論語義疏＞の十八篇で合わせて三十六篇となり、「＜論語＞＜孝經＞ほかでやはり四十弱の議題が論議されたと推測される。戴聖は、＜論語義疏＞の十八篇で合わせて三十六篇となり、「＜論語義疏＞の十八篇で合わせて三十六篇となり、「＜論語義疏＞の十八篇で合わせて三十六篇となり、「＜論語義疏＞の十八篇で合わせて三十六篇となり、「＜論語義疏＞の十八篇で合わせて三十六篇となり、「＜論語義疏＞の十八篇で合わせて三十六篇となり、
まず、梁丘臨が『奏經』して『郷射は合楽し、大射はせざるは何ぞや』と発問し、それに応じて聞人通漢が答え、さらに韋玄成が反論を加え、公卿が韋玄成の議に賛同する形になっている。先に挙げた二三人以外に、公卿も参加していることがわかる。

『禮』の議論なので聞人通漢と戴聖が主となっているが、梁丘臨や韋玄成、蕭望之も発言しており、特に梁丘臨が『奏經』の上で発問している点は注目に値する。唐代の釋義の講経では、論議・侍講、論議・執講・論議・執如意という役割分担が成立していた。石渠議においても議論の形式は未完成とはいえ、経文を読み上げ発問する役割の者がいて、一応の形式に従って議論が進行したと考えられる。

問う、「父逝し、母喪せば、之に為に何をや可服するや」と。韋玄成以く、『父逝すれば則ち母は出るの義無し。王者は義無きが為に禮を制せず。若し服周すれば、則ち是れ子にして母に服するなり。故に服を制せざるなり』と。蕭望之云う、「當に服周すべき。父の後と為れば、則ち是れ是れ子にして母を貶するなり。是れ自ら絶つなり。故に聖人為に服を制せざるなり。下は子を安しざるは是れ自ら絶つなり。故に聖人為に服を制せざるなり。子に母を出ずの義無きを明らかにす。玄成の議是なり」と。『通典』巻八十九所引『石渠議』

この議論における宣帝の発言は、専門家でない宣帝が咄嗟にできる発言とは到底思えないから、事前に筆本が作られていなかった。此に違いない。『石渠論論』を見ると、議論の最終判断を宣帝が下しており、宣帝は単なる観覧者ではなく、自身積極的に議論に参加していることがわかる。

『石渠論論』よりも大まかな議論の流れを復元すると、梁丘臨が『奏經』して発問→聞人通漢・戴聖が應答→韋玄成と蕭望之が反論→宣帝が決定、となる。聞人通漢と戴聖は『禮』の専門家であるが、韋玄成は『條奏其對』『漢書』韋玄成伝、
先の宣帝の発言もそうだが、このような形式に則った議論が「ぶつけ本番」で行われたことは考えにくい。当然、綿密なシンタリオが準備され、宣帝に対しても入念な事前にレクチャーが行われていたと思われる。

「穀梁傳」の例では、上記の学の立に絶えんとするは懸み、乃ち千秋を以て郎中戸将と為し、郎十人を選ひ従い受けしむ。京南の尹更始翁、世より自ら千秋に事え、能く説く。會た千秋病死し、江公の孫を従して博士と為す。劉向は故の諫大夫にし宮に待詔せめ、十人に卒授しむ。元康中、始めて論じて自り、甘露元年に至るまで、積むを千餘年、皆明習す。乃ち五經の名儒太子太傅穀梁傳之等を召して殿中に大議し、公羊、穀梁の同異を平らげ、各の経を以て是非を處せり。

（漢書）

と、優秀な郎を待詔せめて「穀梁傳」を傳授させ、十年以上の講習会の後、「殿中に大議」したとある。

第２節
白虎観講論

その後、穀梁講論より隔たること百三十年、後漢章帝建初四年（七十）、石渠の講論より則る形で北宮白虎観に諸儒が招集され

（楊）

終えな言う。宣帝博く群儒を従し、五經を石渠閣に論定す。方今天下事少なし、学者其の業を成すを得、而し
故
の
渠
石
と
る
称
制
て
宗
罷
て
詳
を
衣
同
に
観
白
を
儒
に
大
中
初
円
う
ろ
で
の
tれ
さ
始
開
準
れ
さ
決
と
こ
う
行
tを
論
で
の
た
っ
go
閣
石
で
ね
重
tを
御
の
で
の
dsい
tて
と
い
tた
tし
t催
tを
ト
ン
イ
敎
な
大
る
w
關
違
か
階
段
い
な
後
位
に
違
た
い
な
か
tは
tた
い
tて
い
tを
論
t
う
の
c
は
tる
置
の
時
年
初
し
參
に
事
な
分
十
け
に
論
t
観
t
違
t
と
こ
る
い
し
傳
梁
穀
の
以
論
t
観
虎
が
儒
tめ
tを
師
れ
が
應
魏
と
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
書
後
﹃
傳
書
漢
後
﹃
白虎観での議論は数か月かけて行われたとあり、それらの議論に章帝が臨席したとは考え難い。先述の楊終の上奏は、事の如し。顧命の史臣、著して通義と為す。《後漢書・儒林傳》

白虎観での議論は数か月かけて行われたとあり、それらの議論に章帝が臨席したとは考え難い。先述の楊終の上奏は、事の如し。顧命の史臣、著して通義と為す。《後漢書・儒林傳》
魏應を重して制を承けて問難を主らしめ、侍中淳于恭奏上し、帝親ら制を称し決に臨む。淳于高さ以て、論難最も明るか、諸儒を称し、帝数は曖昧す。時人嘆じて曰く、「殿中無難の丁孝公」と。「後漢書」「丁鴻傳」にて京師の諸儒を白虎講に会し、五経の同異を論議せしめ、應をして専ら難問を掌らしめ、魏應が制を承けて問難し、淳于恭が奏上したあるので、魏應が章帝の制を受けて發問↓諸儒が議論↓結論を淳于恭が皇帝に奏上↓秘制臨決、の手順で議事が進行したと考えられる。淳于恭の拝持した「奏上」とは、石渠閣講論においての矛盾點を指摘しつつ、議論が進行したと思われる。白虎講論で先立ち、賈逵は章帝の命により「左氏傳」が「公羊傳」や「穀梁傳」の二傳に長する点を條奏しているが、この他にも。

賈逵は帝の為に古文尚書と經傳・爾雅の詰詰問に答せるを言えど、詰して歐陽、大小夏侯尚書・古文の同異を撰せむ。遂集めて三卷を為し、帝之を善す。復亦、齊、魯、韓詩と毛氏の異同を撰せむ。「後漢書」「賈逵傳」に於て、歐陽氏および大・小夏侯尚書との異同は、賈逵は白虎講論の議題の選定や議論の構成において、中心的な役割を果たしていたと考えられるのである。言い換えば、賈逵は白虎講論における同異派の択出する作業が基礎になっていっているのであろうが、言い換えるならば、賈逵は白虎講論の議論の選定や議論の構成において、中心的な役割を果たしていったと考えられるのである。
立場にあったにもかかわらず、なぜ古文派は敗北したのであろうか。
狩野直喜によれば、白虎観講論に参加した諸儒のうち、学派不明の成封と淳于恭を除けば、賈逵以外は全て今文学派で、学派の成封は賈逵を除くと、唯一の古文派である賈逵は、古文学が撜頭しつつあった当時の学問の潮流に逆行し、さらに自らの学問の主張を犠牲にしてまで、宮学である今文学の門下を優先させることで、白虎観講論の成績を達成したのである。

“白虎通”は、その名の通り、白虎観の言葉を借りて講論するもので、白虎観講論は政治的、儀礼的ななものであったと論じる。

石渠閣や白虎観のような大規模な講論以外にも、後漢の宮中ではしばしば経学講論が行われた。講論を改めて、宮中での講論とその儀礼的性格を考えていくことにしよう。

（陳）元子を聞き、乃ち闇に詰めて上疏して曰く、「陛下撥乱反正、文武並用、深く經緯の謬雑にして、真僞の錯

第3節 宮中講論の伝統
正旦朝賀、百寮畢く朝会、帝羣臣の能く経を説く者をして更も相い難詰せしめ、義に通じざる有れば、軽も其の席を奪いて以て通者に益し、戴憑は五十枚もの席を獲得した。宮中における経学講論は一種の娯楽でもあった。白虎観講論では論難を務めた連應は、戴憑は白虎観で論難を賞賛された丁鴻、桓榮の弟子であり、摂の学問であり、質問を兼ねて論難を務めた。都講の質問と博士の回答を繰り返して授業は進行した。漢代の経学の学問を論難として授業は進行した。博士が経の講義をする際に、経を読み上げる壇上生であり、質問を兼ねて論難を務めた。都講の質問と博士の回答を繰り返して授業は進行した。博士が経の講義をする際に、経を読み上げる壇上生であり、質問を兼ねて論難を務めた。都講の質問と博士の回答を繰り返して授業は進行した。
第一章 　辟雍儀禮の成立と明帝の講論

第二章 　長安南郊禮制施設群の成立

前漢末から王莽期を経て後漢初期にかけて、いわゆる禮制改革が行われ、皇帝祭祀・儀禮の儒家化が進行した。儒家の祭祀・儀禮のみならず、儒家的な官僚制、地方制度その他、後世の皇帝制度の規範となる、いわゆる「古典的国制」が確立されている時期である。皇帝制度が儒家禮制によって整備されていく中、儒家天子の支配・教化を象徴する施設として、明堂・辟雍の建立は特に重要な課題となっていた。}

前漢武帝期には、すでに長安城南に明堂を建立することが建議されていったが、実行に移すには至らなかった。成帝期には古代の樂器である古磬十六枚の発見が契機となり、劉向らが明堂・辟雍建設を進言し、場所も長安の城南に決定された。

この時は着工前に成帝が崩御したが、成帝の詔書は辟雍を「成す」ことに因んでいる。（漢書）

その後王莽は自ら「靈臺を建て、明堂を立て、辟雍を設け、太學を張る」と（漢書 翟方進傳）と誇っているので、学者の為に舎萬区を築き、市・常満倉を作り、制度甚だ盛んなり。（漢書・王莽傳上）

は、明堂・辟雍が建設されたのは、王莽執政下の平帝元始四年（四）である。
世宗他部の祭享を除いては、祭享・儀礼の場はほぼ南郊に集中することになる。

これらの禮制し設帳の中で、特に重視されたのは明堂であった。王莽は地元始五年（五）正月に明堂に祭享を行い、居

夏に、明堂にて諸侯に茅土を授ける儀礼を行っている。とくに居攝元年に大射禮を明堂で行ったことには注目したい。それ

以前の前漢の大射禮は、宮中の曲廈で行われていたからである。

曲廈後倉九基。西京太學無しと述べるが、王莽が長安南郊に太學を整備するために、前漢の太學に獨立の校舎が

あったか否か、諸説あってはっきりしない。ただ、〈漢書〉五行志に、御史大夫、大司馬車騎将軍の府に集い、又未央宮承明殿屋上に集う。〈漢書〉五行志中之下、

とあり、雉が養い、之等は「庭」は「延」に通じ、太常、宗正、成相、御史大夫、大司馬車騎将軍の官署をめぐって、再び未

央宮の承明殿の屋上に集まったあるので、大射禮も未央宫で行われたと見られる。王莽はその大射禮を長安城南の明堂

で挙行したのである。

伝統的な観念では、天子の射禮・養老禮・辟雍もしくは太學で挙行されるべきであり、王莽が改修した太學にも射禮が

あった。王莽は辟雍も太學も作ったのに、なぜ、敢えて明堂で射禮を行ったのか。さらに言えば、史料を見える限り、王

莽は辟雍を作っただけで活用せず、儀禮はもっぱら明堂で行っている。明堂・辟雍・太學がそれぞれ独立した別個の建築であるか、あるいは一つの建築の別名に過ぎないのか、膨大な議論が

またそれは、後漢の祭享は、明堂・辟雍・太學は同一物の別名であると述べる。明堂・辟雍に関する經學上の議論に

ある。

16
堂・辟雍を興し、そこで儒教的な義理を行うことが天子の教化に不可缺であると認識されていたのである。

第２節
洛陽南郊禮制施設群の成立

長安の南郊の禮制建築群は、王莽政権の崩壊によって灰燼に帰し、後漢光武帝は即位直後の建武五年（光武帝はただ太学を建設するのなら、比日車駕親臨して饗観を観、將に以て時雍の化を弘め、勉進の功を顕らかにせんとするなり。博士の官を尋ね、天下の宗師と為し、孔聖の言をして伝えて絶えざるしめんとす。）に洛陽の南に太學を修起し、太學に行幸した。建武七年（三三）に、朱浮は光武帝に対し以下のように上奏している。

七年、太僕に贈。浮又諸國學の既に興り、宜しく博士の選を廣むべきを以て、乃ち上書して曰く、「夫れ太學なる者、禮義の宮にして、敦化の由りて興る所なり。陛下先聖を尊敬し、意を古典に垂れ、宮室未だ築らず、干戈未た

休まずして、而して先に太學を建て、進みて横舍を立て、比日車駕親臨して饗観を観、将に以て時雍の化を弘め、勉進の功を顕らかにせんとするなり。博士の官を尋ね、天下の宗師と為し、孔聖の言をして傳えて絶えざるしめんとす。）に洛陽の南に太學を修起し、太學に行幸した。建武七年（三三）に、朱浮は光武帝に対して以下のように上奏している。

七年、太僕に贈。浮又諸國學の既に興り、宜しく博士の選を廣むべきを以て、乃ち上書して曰く、「夫れ太學なる者、禮義の宮にして、敦化の由りて興る所なり。陛下先聖を尊敬し、意を古典に垂れ、宮室未だ築らず、干戈未た
この行幸は、桓篤が博士に任命された建武十九年（四三）ごろに行われたと考えられるが、十九年九月から翌二十年四月まで、光武帝は南方に巡幸した。桓篤が外遊から洛陽に帰る際に、洛陽城外の太学に行幸することが後漢まで数例あるので、この時も巡幸の跡に太学に立ち寄ったのかもしれない。宮中でのみ行われていた御前の研究講座を、光武帝の安定に従い、洛陽に移することになり、桓篤は太学の講師を務めた。

桓篤の教官は、建武中元年（五六）に、ついに洛陽の南郊に明堂・辟雍を建設し、桓篤の推進に伴う太学の改革が進んだ。桓篤の努力により、桓篤の思想は、後漢の中心を形成するに至った。
第三節
明帝辟雍講論と教化

光武帝は三雍で実際に儀礼を行うことなく世を去り、三雍での儀礼・祭祀の本格的な運用は明帝に始まる。

明帝永平二年（五九）春正月辛未、光武皇帝を明堂に宗祀し、帝及び公卿列侯始めて冠冕、衣裳、玉佩、絹縑を服して以て事を行う。禮終りて、靈臺に登る。尙書令をして節を持せしめ諸騎将軍、三公に詔して曰く、「今令月吉日、光武皇帝を明堂に宗祀し、以て五帝に配す。禮は法物を備え、楽は八音を和し、社稷を詠し、功德を舞い、時令を班し、群後に教す。事畢り、靈臺に升り、元気を望み、時律を吹き、物變を観る。群僚藩輔、宗室子孫、衆郡計を奉り、百蠻貢職し。鳥桓、漬領咸な来たりして助祭し、單于侍子、骨都侯も亦た皆な陪位す。……（後漢書）明帝紀・永平二年

明帝以下百官は初めて冠冕・衣裳を服して明堂の祭祀に臨むが、この冕服制度もまた、明帝が『周官』『禮記』『尚書』等より古制に基づいて創始したものである。

永平二年正月に皇帝以下百官が冠冕・衣裳を着るためには、一応造は陳留で行っている（續漢書）軒輊志下に、「衣裳玉佩は章采を備え、乘輊は刺繍、公卿九卿以下は皆を織立て成し、陳留編邑之を献すと云う。とある」具體的な事例は私から試作・製作の時間を考慮すれば、絨を拷案しての基本デザインの確立は永平元年の半ばには終わっていたであろう。

『後漢書』樊紹傳には、永平元年に長水校尉となった樊紹が公卿と郊祠禮儀を難定したとあり、また『東觀漢記』によれば、永平二年正月に東平王蒼が南北郊祀の冕冠裳衣を明堂の制度と同じにすることが述べているから、冕服制度は南北郊祀の詳細ともに、東平王蒼と樊紹が中心となって確定されたと考えられる。

明帝は永平二年三月には初めて辟雍で大射禮を行った。この後、明帝は四年（七一）十月、八年
前言

昭和五年（一九三 Zero）九月，十四年（七零）の冬にも辟雍にて儀礼を挙行しており、明帝の辟雍重視の姿勢がうかがわれる。

明帝永平二年三月、上始めて群臣を帥いて躬三老・五更を辟雍に養い、大射の大禮を行う。郡、縣、道は卿飲酒を学校に行い、皆な聖師周公、孔子を祀り、牲は犬を以う。是に於いて七社稷風三雍の義備り、三老・五更を養うの儀、吉日に先じて、司徒は太傅若しくは講師の故の三公の人名を上げ、其の徳行年著高き者一人を用って老と為し、次ぐ一人を更と為すなり。皆な都舎大袍単衣、臥縁領袖中衣を服し、進賢を冠し、王杖を執す。

天子の辟雍を立つるは何故也。辟雍は、禮楽を行い、教化を宣ぶる所以なり。辟雍を立てた者は、之を壇たすに水を以てし、教化の流行するを象るなり。辟雍を立てた者は、辟雍を盛んにし、明堂に坐して羣后に朝し、靈臺に登りて以て雲物を望み、辟雍の上に俎制し、三老五更を尊養、清道の儀を盛んにし、明堂に坐して羣后に朝し、靈臺に登りて以て雲物を望み、辟雍の上に俎制し、三老五更を尊養、
諸儒と講論する皇帝の姿を一目見うとして，諸儒内の論争たちが辟雍に抑し寄せ，辟雍の四面の門をぐるりと取り囲む水が天子の教化を天下に行き渡らせる作用を果たすのである。

明帝は永平十四年冬にも再び辟雍で自ら「制所の五行章句」を講じている。

デスの教化を象徴する辟雍において，皇帝御前の儀礼的な講論を京師以外で挙行したことでも創期的であるが，さらに皇帝の講論における講論の先鞭をつけるものである。章帝は皇太子時代に孔子旧宅で講論を行った後，自ら講論した記録
はなく、

元和二年春、帝東のかつ巡狩し、還りて魯を過り、闕里に幸し、太牢を以て孔子及び七十二弟子を祠り、六代の樂

を取り、大いに孔子の男子二十以上者六十三人を會し、儒者に命じて論語を講ぜしむ。《後漢書·儒林·孔儒傳》

と、元和二年（八五）魯への巡狩の途中で孔子舊宅に立ち寄り、孔子と弟子を祭祀し、孔子の男子を招集して講論を行わせている。前聖先師の祭祀と結びつくたることで、講論の進行において中心的な役割を果たしたが、この二人はいずれも皇太子

へ、太子太傅肅望と淮陽中尉韋玄成は、議論の進行において中心的な役割を果たしたが、この二人はいずれも皇太子

元帝」と淮陽王という、宣帝の息子たちの輔導者であった。公卿も列席・参加した盛大な催しを、當然の二人の皇子

も参観したはずである。

後漢永平二年

明帝は辟雍にて、史上初めて皇帝自ら講論を行った。本来であれば、光武帝が生きていれば、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずである。だが、その場合でも光武帝が自ら講論したであろう。明帝末年の東方巡狩において、孔子舊宅の先聖先師の祭祀の後に、辟雍儀礼は光武帝によって実施されたはずです。
思の六四九一等傳德後論
想思利て虎（論傳王陳八九論／墨34館B
歷﹃てつに白（論傳王陳八九論／墨36都CD
諸（蓺論代漢年稿拙﹃）
﹃渠石﹃（儒浩者いなを稱觀）
﹃於淸屡見）
﹃於憚淸﹃（儒浩者いなを稱観）
﹃於憚淸﹃（儒浩者いなを稱観）
﹃於憚淸﹃（儒浩者いなを稱観）
の\(\text{文} \)を\(\text{な} \)れて\(\text{と} \)る\(\text{文} \)を\(\text{し} \)る\(\text{と} \)の\(\text{言} \)は\(\text{不} \)で\(\text{は} \)く\(\text{公} \)."
論文（1951年）

河間正康：『前漢末期における儒家制度の変容』

日本学術振興会：『墨池』

校長：昭和四十七年

関東学院大学

教授：石川雅之

『墨池』

校長：昭和四十七年

関東学院大学

教授：石川雅之
明帝による明堂・辟雍儀礼について

（抜粋）

明帝は、明堂・辟雍の改革に着手した。明堂は、古代の祭祀の場であり、辟雍は学問の場を兼ねる施設である。明帝は、これらを改革し、新しい形式に変更した。

明堂は、壇の形状を変更し、十二神の像を設置した。辟雍の水路は、水の流れを模倣し、学問の流れを表すものとした。

さらに、明帝は、明堂と辟雍の儀礼を改定し、新しい形式を導入した。これにより、漢代の祭祀・学問の儀礼が新しい形で実施されるようになった。

（抜粋終）
『儀礼』/墨3都類D
飲酒之州項尾金丸丸
玄/墨3666
今郡國十
行此飲酒之州
邦索鬼神而祭祀
則以禮屬民而飲酒于此序
以正齒位之說
然此無正齒位之事焉
凡黨飲酒必於民聚之時
欲見其尚賢長也
とあり
後漢時代に地方で飲酒禮を行っていたことがわかる
『後漢書』王闕傳/墨3666引袁山松
﹃後漢書﹄に﹃後漢書﹄に﹁閏幼聰﹂とある
黃暉﹃論衡校釋﹄(中華書局一九九○)に收録され﹁王闕年﹂ではこれを永に繫年し
﹁漢晉學﹂では﹁円武二十年﹂とる
﹁後漢書﹂桓郁傳/墨3666/墨3602引﹃東觀漢記﹄に﹁其冬親於辟雍自制五行違句﹂とある
同じに引く﹃華嶠後漢書﹄に﹁自制五行違句﹂とある
桓郁傳の本では﹁自制五行違句﹂とある
辟雍碑の釋讀は京都大学人科學硏究三國時代の出土字料班著﹃魏晉石刻﹄(京都大学人科學硏究)に据る
余嘉錫氏揭論福原氏揭書
This paper investigates the debates on the classics that were held at the court in the presence of emperor during the Han era and makes clear that these debates had the character of ritual rather than of a purely academic discussion. I also examine the process by which the debates were incorporated into the system of imperial ceremonies.

In the Han era, the debates on the Confucian classics were sometimes held at the court in the presence of the emperor; preeminent examples of which are the debate held at the Stone Culvert Pavilion (Shiquge) during the Former Han era and that at the White Tiger Pavilion (Baihuguan) in the Later Han era. These debates had the character of a ritual, and were also a sort of amusement. After the Bright Hall (Mingtang), the Royal House of Music (Biyong), the Spiritual Terrace (Lingtai) and the Imperial Academy (Taixue) were established in the southern outskirts of Luoyang, debates on the classics were also held when the emperor visited the Royal House of Music or the Imperial Academy. Emperor Ming, the second emperor of the Later Han, performed the Grand Shooting Ceremony (dasheli) for the first time at the Royal House of Music, and participated in the debates on classics himself. This behavior fulfilled the Royal House of Music’s function of spreading the virtue of the Son of Heaven throughout the empire, and embodied the apotheosis of the Confucian Son of Heaven.

The debates on the classics performed by emperors themselves on the occasion of imperial ceremonies were the precedent for the debates held by young emperors or crown princes on the occasion of the festival in honor of Confucius (shidianli), which was established in the Six Dynasties era, and demonstrated the ideal of Confucian rule in which the Confucian Son of Heaven edifies the empire.